

■第21回「哲学系読書会(仮)」

■課題図書：G・バタイユ『呪われた部分 全般経済学試論＊蕩尽』（酒井健訳・ちくま文芸文庫）
二部、第三部

■報 告：ハマ

■日 時：2022年09月27日(火)18時半より21時半まで

■会 場：北区民センター

第3部 歴史のデータⅡ 軍事企画社会と宗教企画社会

第1章 征服社会 ―― イスラム

第1節 イスラムに意味を与える難しさ (P123)

ムハンマド(570～632)

人間と神を同時に分有するイェスとは違う。三位一体を否定。神の啓示の栄光に浴したが、一人の人間にすぎない。

ムハンマドの後継者 カリフによるイスラム帝国、そして衰退(オスマン帝国、1922年滅亡)

ムハンマドの言葉、我々(ヨーロッパ)にとって仏陀やキリストの言葉のように語りかけない。

エミール・デルマジヤンの論文(1947年)

自由、寛大さを強調しているには、驚きを禁じえない。説得力に

コーラン(ムハンマドが預かった神の言葉の集成。イスラムの聖典)

「神は抑圧者を愛さない」一神の概念と不当な抑圧の二律背反を認めることができる

イスラムの主権は専制君主制である。自由一反逆に基盤を持ち、不服従

イスラムという言葉は服従を意味する、イスラム教徒は服従する人

多神教諸部族のアラブ人の個人主義に対置された規則。自由はイスラムに対立する。

戦争について

聖戦(ジハード)とは、イスラム教徒自身に絶えず向けられるべき自己放棄のための戦争である。

イスラムの初期の征服は穏やかであった。

ハディース(初期法典)は征服を体系的に秩序づけた。

《イスラム地域》に隣接する《戦闘地域》の民に対してはジハードを行わなければならない。

聖戦は常に国境線で生じる。が理論上の概念で、実際には異教徒と10年間の休戦協定が結べるとした。

征服企画は、成し遂げられると、一個の空虚な枠組みとなってしまう。

イスラム社会、不安定でなくなり、より一層形式的になった

第2節 ビジュラ以前のアラブ人の蕩尽社会 (P130)

ビジュラ：622年ムハンマドとその信徒が迫害を受けたため、メッカからメディナへ移住

それまでアラブ諸部族

多神教。激しやすい個人主義、ポトラッチの儀礼的形態の存在を推測することができる。

多神教のまま流血の供犠を行っていた。

近隣の諸地域は、強力な軍事組織を備えていても、支配拡張の可能性には関心を示していなかったと仮定

イスラム以前、彼らの生活様式は、蕩尽社会の原則にかなっていた。

第3節 誕生期のイスラムあるいは軍事的企画を強いられた社会 (P132)

「初期イスラムの敬虔主義」 プロテスタントの経験主義と類似

一個の経済を誕生させた。資本の蓄積が最も重視される経済

ムラワ：イスラム以前のアラブ諸部族あった個人的栄光の《雄々しき》理想

ディン：服従のための規律を対置した。

「浪費家は悪魔の兄弟」

規律と儀礼を遵守する四角四面の信心深い兵士が台頭

敬虔な軍隊による怒涛のごとき征服が終わると、詩の伝統が復活。

気前のいい浪費へのノスタルジーがイスラム社会に残存していた。

「蓄積する厳格さと浪費する鷹揚さとの交互の生起は、エネルギーの使用ではよくある規則てきな動きなのである」 <エネルギー>

イスラム、勢力範囲を無際限に拡大することに向かった。

当初からイスラムは、みずからの宗教の誕生の地と暴力的に対決せねばならない必要性
イスラム教徒がアラブ諸部族から追放の迫害を受ける
で、ヒジュラ（聖なる遷都）となる。
ここに、一個の共同体の出現、血統・地域にも基底を持たない新たな種類の国家が出現
宗教上のリーダーが同時に立法者、裁判官、軍隊長となる。
これ以上厳密に統一化された共同体を想像することはできない。

成長を阻害していた難題（部族の境界）が取り払われ、軍事遠征のために温存
ハディース：資本家の蓄積による近代産業の発展を想起させる。

イスラムの征服行為、キリスト教、仏教の発展に対比すると、無力であることに気づく
産業の発展には消費の限界を設定する必要がある。生産設備が第一に重視する。
イスラム教徒もそれと同じ価値観を含んでいる。
力の消費それ自体をすべて捨て去った

キリスト教、仏教の弱さーこれらの共同体は既存の政治体制に仕えないといけない

イスラムは当初から蕩尽ではなかった。いかなるドラマ化も不要
十字架上のイエスの死、ブッダの無我の喜びに対応するものは、ない。
イスラムは宗教の形式を軍事の形式に従属させた。
イスラムは供犠を縮小し、宗教を道徳、施し、祈りの遵守へ、限定した。

第4節 のちのイスラムあるいは安定への回帰 (P139)
イスラム帝国が形成されると、創設のイスラムの意味は消滅
ただ空虚で硬直した枠組みだけ存続。
ひとたび征服行為が落ちつくると、浪費と破壊という否定が基本のアラブ人文明が息を吹き返した。
アラブ諸部族のムラフ：暴力と気前のよさ、恋愛と詩との合体。
我々（ヨーロッパ）が受け継いでいるのは、ムハンマドではなく、ムハンマドに非難された騎士道の
価値に由来している。
騎士道という表現自体、十字軍の時代に新たな意味、詩的、情念の価値につながる意味を持った。
12世紀の西洋、武装の儀式はある意味イスラム的
南フランスの情念の詩の誕生は、スペインのアンダルシア地方の伝統を継承
廻ればムハンマドの激しい反応をひきおこしたアラブ諸部族の詩の競技会に行き着く。

第2章 非武装社会 —— ラマ教

第1節 平和な社会 (P142)

チベット、孤立した平和文明ー攻撃にも防御にも不向き、風土の貧しさ、広大さ、起伏、寒冷さが
軍事力なき国家の防衛者

第2節 近代チベットとそのイギリス人年代記作者 (P145)

チベット：中国とインドの2大国の緩衝地帯

第3節 ダライ・ラマの純粋に宗教的な権力 (P147)

640年、仏教がチベットに導入。僧院制度の広まり。
《黄帽派》厳格な改革派が弛緩した《紅帽派・こうぼうは》を倒す。
ダライ・ラマは死すべき存在ではない。表向きは死ぬだけであり、すぐさままた人間に化身する。
〈生き神〉信仰

第4節 第13世ダライ・ラマの無力と反逆 (P152)

中国、インド（イギリス）との政治的駆け引きのなかで、ダライ・ラマ13世は自分の限界を知った。
彼は宗教的な勢力ではあったが、軍事力がなければ何もできないという限界

「だれも二人の主人に仕えることはできない」 チベットはその全盛期に、僧侶を選んで諸侯をな
いがしろにした。

威光はすべて、伝統と神的儀式に包まれたラマ僧のほうへ行ってしまった。
この体制は軍事力の放棄をひきおこした。

第5節 軍事組織化への試みに対する僧侶の反逆 (p158)

第6節 ラマは余剰の全体を蕩尽する (P161)

3人の成人男性のうち一人は聖職者。300万から400万の総人口中、25万から50万の聖職者がいた。
国家の総収入 72万ポンド
軍事費 15万ポンド
行政予算 40万ポンド
聖職者の収入 100万ポンドをゆうに超えていた。
聖職者組織の予算総額は、国家予算の概ね2倍、軍隊の予算規模の8倍を上回る
宗教生活ばかりが肯定されている。この国民感情が当初どのようにして定着するようになったかという問題
が検討課題となる。

第7節 ラマ教の経済的解明 (P164)

一個の社会はその存続に必要な分以上のものを生産する。社会のあり方を決定しているのはこの余剰を社会がどう使うかなのである。
歴史は耐えず成長の停止、再開を繰り返す。
イスラムは軍事力を増大させ、贅沢な生活形態を批判
プロテスタント、ついで革命勢力によって、贅沢な生活形態の批判を繰り返す。
近代においては、余剰の最も重大な部分は資本主義的な蓄積に充当されている。
チベットの位置は、イスラム、近代世界の立場の逆である。
チベットでは僧院制度が極端な解決策となって、余剰の全体を僧院に差し出す

地域の住民、自身エネルギー体系、そのエネルギーを発展できず、容量を増やすこともできなくなったときは、余剰エネルギーをその全体において純粋な消失のうちに消費しなければならない。

僧侶集団の独身制度、人口減少の脅威でもある。
人々の明るい人柄(?) ラマ教の輝きこそこの本質を精神面で実現している。

イスラムは余剰全体を戦争に、近代世界は産業施設に、ラマ教は瞑想生活に差し出した。
ラマ教だけが獲得と増加を目的する活動から遠ざかっている。
ラマ教においては、直接的に、ただちに生が生自身を目的にしている。

チベットの儀式、軍事形態の敗北が儀式の表現の目的。ラマ僧たちは暴力が外部へ粗暴に放たれる世界に勝利したことを祝っている。

僧院制度は、純粋な消費であると同時に消費を放棄することでもある。
この大胆なエネルギーの使い道を人は重視してすぎることはないであろう。
この使い道は、経済の均等の全般的な条件について示唆を与える。
この使い道は、人間の活動をその限界の前に立たせている。そして、軍事的活動や生産的活動の向こうに、いかなる必要性によっても従属を受けない世界があることを描きだしている。

第4部 歴史のデータⅢ 産業社会

第1章 資本主義の起源と宗教改革 (P173)

第1節 プロテスタントの倫理と資本主義の精神 (p173)

マックス・ウェーバー 『プロテスタントの倫理と資本主義の精神』(1904)
ルターは、素朴な、半ば農民的な反抗を唱えた。
カルヴァンは商業都市の中産階級の渴望を代弁した。
ウェーバーに対する批判 R・H・トーニー

17世紀後半までピューリタンと資本主義の一致は完全に成し遂げられていたわけではない。

どちらかといえば、経済条件によって生じた結果であって、経済条件をもたらした原因ではない

第2節 中世の教義と実践における経済 (P176)

中世の経済と資本主義経済との差

中世の経済

変化のない(スタティックな)ままに、余剰資源を非生産的に蕩尽していた。

資本主義経済

蓄積をこととし、生産施設のダイナミックな成長をひきおこしていた

中世のキリスト教思想 トーニー

この思想の本質は生産活動をキリスト教道德の掟に従属させる原則にある。

聖職者階級、軍人貴族階級、労働者階級が、ひとつの集団を形成

労働者階級がより上の二階層の部分に服従

生産者が貴族と聖職者の生活必需品を供出

その見返りに生産者は貴族に保護してもらい、聖職者からは靈的生活への参加を可能にてもらい、さらには道德の規則を受け取っている。

聖職者と貴族の奉仕から解放され、自然の一部分のように自律性と自固有の掟を持った経済世界といった発想は、中世の思想には無縁。トーニー、マルクスの中に「最後のスコラ哲学者」を見ている。

高利貸しの禁止は教会法。

利子—時間を使って得をする。空間と違って時間は神の所有物

時間は自然の中に存在

自然法 《金銭+時間》に利子という付加価値を与える

(キリスト教の)道德的思想は自然法の否定。教会の介入は生産力の自由な発展を阻止していた。

中世経済の本質は社会が富に与える意味にあるだろう。

富の意味は、経済システムの本質を決定しうる。

富の意味—なにを期待するか、それによって意味は変化する。

結婚できるという可能性

無為

社会的身分の変化

.....

資本主義時代において富の利点 投資できるという利点 生産力の増加に割り当てられる。

個人の目的でなく、ある時代に決定された社会が集団として選択。富を増加させることに力点

宗教改革以前・中世では

余剰資源の破壊

・ピラミッドの建設・無為・アルコール などなど

快楽を与える。必要性なき選択、この快意、富の価値(意味)を決定

中世の経済社会を定めていたのは、神学者の理論ではなく、大聖堂、大修道院、無為の修道士に対して快意にひかれながら持っている欲求

神に快意を与える慈善の仕事の可能性

宗教とは、一個の社会が富の余剰を使用して引き起こす快意のことである。

宗教活動—超過エネルギーを解消する。

無為の修道士、ブッダの僧侶も托鉢。労働はしない。

有効な行動の連鎖を断ち切ること意味があった活動に、二次的な効果を与えてしまう。(??)

重大な不快感が生じ、宗教の世界を満たしている(だまされているという印象) (??)

農地の豊作(卑俗)をあてこんだ供犠(聖なるもの)は、俗悪なものに感じられる。

キリスト教の救済は、生産的な活動の領域から宗教的な生活の目標を解放するものなのである。

(??)

救済が良きことをした功績の報いになる。とすればキリスト教徒はその仕事によって自分を救済するように試みる。

そうすると、神聖なものを汚すように感じられる。恩寵の真実に反する。物のように原因と結果ではない。

神の本性が敬虔な魂に向けて行う自己贈与は、なにかを行って得られるというものではない。

何もしてはいけない。祈りという無為だけが恩寵をもたらすのか??

第3節 ルターの道徳的立場 (P184)

ルターが斥けたもの

修道院、托鉢修道僧、祭り、巡礼、浪費したからではない。

これらの手段で功績が得られるという考え

浪費の経済体制の批判、富および奢侈を敵視する福音書に反している。

免罪符の購入で天国の時間を購入できる。この資金は聖職者の贅沢な生活と無為へ

富を有用性から取り上げて栄光の世界へ返す手段など存在しない。

カトリック教会は地上を天国にすることよりも、天国を地上のように卑俗にすることに成功した。

中世の都市にはローマ・カトリック教会が創造した世界のイメージ（ゴシックの大聖堂）が残され、富の直接的な使用の結果を描き出している。有用性の世界では直接的な価値を失ったが、中世の光は我々の眼の前で今もなお輝いている。

第4節 カルヴァン主義 (P186)

ルター：地上の活動によって神に答えることができないという人間の非力でも、人間の活動は道徳の掟に従属すべき。

高利貸しに対する呪詛、(経済全般に)概して古風な嫌悪感を抱いていた。

カルヴァン：利子付き貸与の批判を捨て去り、商業の道徳性を承認

ウェーバーは資本主義精神の形成における決定的な価値をカルヴァン主義に与える。

ジュネーブ・オランダの中産階級（ブルジョワジー）の宗教

トニー：カルヴァンと中産階級の間を、マルクスと労働者階級の関係に匹敵する。

カルヴァンは中産階級に組織化と教説をもたらした

救済のための功績と仕事を斥け、仕事は必要不可欠で、救済が実際に到達されたことの証し

「召命」と「天職」、カトリックの再導入

瞑想の無為・奢侈・慈悲の施し＝富を無益に消費することを否定

有用性の美徳

カルヴァンは、ルターの価値の転倒を極限まで推し進めた。

神を讃える手段としての、人間自身の栄光（大聖堂・彫刻・絵画、壮麗な美のオーラ）を否定

人間の生活の非神聖化、人間の仕事の空しさが決定。その職業なり職務への愛着に深い意味と完成された価値を持つことはなかった。

第5節 近代への宗教改革の影響——生産の世界の自律性 (P190)

宇宙という無限の富を直接的に使用することは神に委ねられて、人間は労働だけ

トニーは更に、資本主義に必要な要素：非個人的な経済力の自由な成長、経済の自然な動きの解放

古い経済法の道徳原則 企業を社会に従属させる

価格の統制

利子付き貸与の実行に規制

カルヴァン主義が支配していたジュネーブ・スコットランドでは、カルヴァン主義は集団専制体制へまた極端な個人主義に流れて行った（具体的、歴史については）

17世紀後半のイギリス、ピューリタンがカルヴァン主義の伝統を自由な利益追求へ

生産領域における宗教世界の道徳的主権が破棄される。

「中世経済を築いていた権威を破壊すること」かなり時がたってから解き放たれた。

この遅れを解き明かすものが、資本主義のほとんど弁護しがたい先験的な特徴（??）

資本主義の精神と倫理が純粋な状態ではほとんど一度も表明されなかった。

ベンジャミン・フランクリン、資本主義の精神をほとんど古典的な純粋さで語っている。

「時は金なり、金銭は金銭を生み、5シリングは6シリングになり・・・ついには1ポンドになる一匹の雌の豚を殺す者は、何千匹ののぼるその子孫を滅ぼしたことになる」

(中世経済・カトリック教会) 宗教的な供犠の精神に逆行するもの、莫大な非生産的な蕩尽を正当化ルター時代には、公然と対置させることができなかった。

宗教改革者たちの感情、宗教的な純粋さを求めると同時に、聖なる世界、非生産的な蕩尽の世界を破壊してしまった。地上を中産階級に譲り渡してしまった。

この階級の完成された姿こと経済的人類なのだ。

第2章 中産階級の世界 (歴史のデータがほとんどない)

第1節 仕事のなかに内奥性を求めることの根本的な矛盾 (P197)

産業社会は商品一物一の優越と自律に基づいている。

この社会の根源に、本質的なもの一恐れさせかつ魅惑するもの一を活動の世界の外へ、物の世界の外へ置きたいという、本質的なものに反した意志を見出す。(??)

「本質的なもの」、「物の世界の外」(??)

(この意志は、) 資本主義は人間を物(商品)に還元するという事実逆行するものではない。

宗教と経済の対立：カルヴァン主義が大胆に解決した。

一般に宗教は、自分自身を見出したい、見失われてきた内奥性を回復したいという欲望に応えてきた内奥と外面を取り違えてしまって、矛盾した応答、内奥性の外面的な形態した人間に返してこなかった。

現代社会は幻想的な何ものも探究しない。物(商品)によって提起された問題を直接に解決しながら本質的な征服を確保しようとしている。(??)

我々が善を探しにでるとしても、その探究は活動、その活動は物の世界だけに属している。

我々は物の探究しかめざすことができない。

カトリックのプロテスタントの慈善事業への批判。

この批判の最終的な帰結は、人類を物の次元のなかでなしうることをするように、駆り立てる。

物に仕えたまま物を整備改善するぐらい。

経済の問題を解決せずして、自分の真実を再発見できないと考えるのは理にかなっている。

経済の問題の解決、必要条件について、これは十分条件と信じることもできる。

物の世界で生じた要求を満たせば、人間は自由になれると断言できる。

それは、生活必需品を満たすのに欠かせない物理的な整備改善において必要な要求にすぎない。

物質的問題の解決は十分条件である。最も容認できるものだ。

生の問題の鍵、人間にとって大切なのは一個の物であるだけでなく、至高に存在することでもあるという点。

カルヴァン主義について

人間への探究は何らかの仕方人間を行動へ駆り立てるのだが、その行動がまさに人間を人間から遠ざけるものになっている以上、いったいどうやって人間は人間を見いだせるというのか、いったいどうやって自分を再発見できるというのか。

この根本的な問題をカルヴァン主義は予告していると

第2節 宗教改革とマルクス主義の類似 (P201)

宗教改革者たちの帰結：「世界の相対的な安定、均衡を終わらせた」

人間性を裏切っていない表情を探し求め、、ゴシックの鐘塔がそそり立つ、死んだような中世の都市へと向かう。

中世の「作品」も物でしかなかった。しかし社会の中の中世の形象は「失われた内奥性」を喚起する力を今日も持っている。

「教会堂」と「納屋」

物は物質的な特質以外の意味を持たない。「納屋」

「教会堂」、内的な感情を表現、内的な感情に語りかける。建築という物である。「納屋」は真に物である。

「教会堂」一労働の虚しい蕩尽に対応、物理的な有用性から引き離されている。有用性の破壊

内奥性は、一個の物によって表現される。この物が商品とは反対の事態であるという条件

物ではなく、蕩尽が内奥性の感情を表現している。(矛盾)

物は内奥の感情の否定

神の栄光：神はある意味で、深淵を見て不安に陥る人間から遠く隔たった表現

世界?動物?人間

人間は、動物性を離れて世界を失いはしたが、しかしそれでも世界を失ったことへの意識になった

この意識を持った人間こそが人間なのだ。

中世へのロマンティックなノスタルジー、反動的なロマン主義の産物

ノスタルジーは、産業の発展の基底に、異議と変化の精神があったことをみようとしない。

どこからでも世界の可能性の果て(??)へ向かわなければならぬといふ必要性を見ようとしない。

神聖な作品に対するプロテスタントの批判、この批判は、世界を俗なる作品に打ち捨ててしまったのだ。

神の純粋さへの要求

神的なものを追放して人間を神的なものから完全に切り離すことしかできなかった。

物が人間を支配するようになった。物の支配は全面的でない、喜劇・半分ほどしか人間を欺かない

別の半分では、新たな真実(??)が、それにうってつけの暗闇のなかで、嵐に転じている。(??)

プロテスタントの立場

神の本性は到達できず、行動に埋没する人間の精神に(神の本性を)還元できない。

もはや今日まで一貫する意義は持っていない。

この世界に(神の本性は)不在の立場。これは虚偽

宗教改革の根本原理、行動を陶冶することをやめってしまった。

清廉潔白さへの繊細なカルヴァンの要求

僅かなものにも満足しない理性の鋭い緊張

思考の過激主義的で反逆的な性格。

大衆は、生産の惰眠に身を委ねて、物の機械的な実存を生きていた。

この意識的な思考(根本原理)は、人間を諸物(生産活動)の認識へ導く。明晰になっていく認識へ

科学は、意識を物体に限定し、人間を自己意識へ導かない。主体を客体とみなして初めて、物とみなしてはじめて、主体を認識できるようになる。

科学は、正確さへ慣れさせ、そして失望させ、覚醒に貢献している。(??)

自己意識に到れない自分の非力を告白(??)

意識的な思考、自分自身を見出したいという根本的な欲望を断念していない。

この欲望はいっそう激しさを増すばかり。(??)

プロテスタンティズムは、人間が人間の真実と出会うことをあの世に引き渡してしまった。

(具体的な歴史のデータがないので、了解できない・・・)

マルクス主義はカルヴァン主義以上に、人間の直接的な自己探究の傾向を排除した。

マルクスは、行動を物質的組織の変革をはっきりと呈示

物以外への配慮(宗教上、感性に関わる配慮)に対して物(すなわち経済)を根源的に独立させる。

他方、人間が自己へ、内奥性へ回帰する独立の動き、行動に対するその独立(回帰)を、論理的帰結として示した。

後者の独立（内奥性へ回帰）の働きは、解放がなし遂げられたときはじめて、生起しうる。ひとたび行動（物理的組織の変革）が完遂されたとき（革命）、この動きは開始されうるのだ。（人類の前史が終わる???)

先程述べた混同（??）物と物以外

「物質的な問題の解決は十分条件である」

「ただ単に一個の物のように存在するだけでなく、さらに至高に存在すること」

=>「人間の不可避の帰結」

「物質的要求を満たす答え」とは異なっている

マルクスの独創性、物質的な障害を取り除いてから、精神的な結果に到達したいという意志にある。

この意志のせいで、物質的な財に排他的に気を配るようになった（??）

隠された目的に従属させる宗教的な諸形態への嫌悪

マルクス主義の根本命題

諸物の世界（経済）を諸物（経済）の外のあらゆる要素から完全に解放すること

諸物のための政権を立てることによって、人間を物へ還元する動きをその究極の帰結に導くことによって、マルクスは、決然と諸物を人間へ帰属させようとしたのだ。

この展望、人間は物との完全な一致を実現して行動から解放。人間はいわば物を支配下に収めることになるかもしれない。

新たな1章がここに始まって、人間は自分自身の内的な真実に帰る自由を持つようになるかもしれない。

マルクス主義、内奥性の次元では自分を隠していて、何も提案しない、ゆえに、カルヴァン主義の完成版というより、資本主義への批判になっている。

第3節 近代産業の世界あるいは中産市民の世界（P210）

資本主義は、無条件に物（生産物と生産行為）に身を委ねること。

資本主義者にとって、物になりたいと思っているものではない。

カルヴァン主義：自己否定＝神を肯定すること。自己否定は到達できない理想。

資本主義：物と生産に与えられた自由、人々に共通の可能性。霊性を維持することなど必要ない。

初期、物の隷属の原則がひとたび承認されてしまうと、諸物の世界（近代産業の世界）はひとりで発展。

この世にいない神のことなど考える必要はない。

物の支配は、純粋な力（成長以外に目的を持たない成長）への意志にも応えていた。

この意志は、隷属的精神の補完でしかない。

消費へ使用されることのない力への奉仕。カルヴァン主義の姿勢と見分けがつかなくなる。

カルヴァン主義は資本主義の対立物であるというのに。

カルヴァン主義者は、覚醒と緊張の頂点

産業成長の人間は眠り

中産階級の資本主義は奢侈を敵視していたが、ただ軟弱に、支離滅裂にそうしていただけ。

放任主義を捨て去ったことは一度もない。

こうして中産市民階級は混乱の世界を創造。この混乱の世界の本質は物

成長の眠りに入らなかった人（??）は、彼岸への探究が放棄されたのを見て苦悩（??）

物が広く勝利をおさめ、大多数の人の動きを支配していたがゆえに、挫折したかつての夢（??）すべてが誰の手にも自由に手に取ることができた。

（挫折したかつての夢とは～自己否定から神の肯定??）

生命（蕩尽へ向かう地球全般の生命の動き）はこれらの夢から抜け落ちていた（??）

夢は途方にくれた人々に慰めとして役立っていた。カオスが始まった。

すべてのことが正反対の方向に向けて同じように可能になった。

社会の一体性は、主要産業によって維持されていた。

過去の誘惑物（中世へのノスタルジー）は矛盾を人へ差し向けたが、憎むべき現実の世界では矛盾を感じない。人間が基準となった世界（??）

ロマン主義の抗議も自由だ

社会の一体性のなかで考察すれば、一個の物にだけなっていることに同意している。

第4節 物質的な難題の解決とマルクスの急進主義（P214）

人類は、中産市民階級（ブルジョワジー）の共犯者である限りにおいて、諸物以外の何ものにもならない。

混乱した民衆のただなかで、厳格な精神が繁殖する（革命運動）

厳格な精神の本質：物の完成（諸物と人間の完全な一致）という経路を、人間自身への人間の到達もしくは帰還を欲する（??）

厳格さは明確な目標：余剰資源を生活の物質的な不均等（貧富の差、貧困などか？）の解消と、労働時間の短縮

根本的な目標実現のために直接的に武装を整えている。（武装蜂起による革命）

産業文明の設備、様々なサービス、少数者の特権者に限られていない。

かつての豪勢な富の使用（中世？）は役割を持っていた。価値の表明（??）。

この価値の表明は間違った考え。

物の否定が原則になっていることを物のように捉えたがっているように仕向けた

厳格さの精神は、旧世界の残存物を破壊

物質的な可能性を自由に発展させたが、この発展をこぼむ様々な特権を容認（??）。

科学と技術から帰結を引き出す、眼前の世界のカオスそれ自体の厳格さへ追い込むということ。

諸物に対する操作すべてを合理的につなげることへ眼前のカオスを追い込むということ。

この厳格さは革命的な意味を持つ。

第5節 封建制と宗教の残存物（P215）

過去の価値観をまず取り除く必要性

公認の価値観の名の下に労働が浪費。→浪費される労働を供給する人々

労働者は聖職者と貴族に対して、隷属的な性格

自分たちは諸物ではないと言い張るが物の性格は、全面的に労働者に降り掛かった。

この状況は、

人は物の可能性の果て（?）まで行って人間を解放したいと思うこと

労働を拒否する以外に意味を持たない人々を、自由に振る舞わせておくこと

2つを同時に果たすことはできない。

人間を人間に唯一返すことができると人々がみなす高貴な仕事（?）のために、低俗な労働（?）を否定している。

残存物は、労働者を一個の物にしたいという不変の、無意識の意志を表している。

労働者の労働を否定する仕事に従事してはじめて自分を解放できるなら、労働者は物として存在することしかできない。

物の完成（人間と生産の一致）は、古い価値観が、告発され解体されてはじめて解放の力を持つことができる。

人間の自己回帰。まず貴族体制と宗教の顔が偽りだと暴かれることが必要。

人間の自己回帰は、パンやハンマーを手に入れるように内奥性を手に入れると豪語している人々の間違いと混同されるべきではない。

第6節 共産主義、および人間と物の有用性との合致（P217）

根源的な立場：労働者は政治的な帰結を与えた。

物質的で現実的な力への根源的な肯定、霊的な価値への根源的な否定

共産主義者は、物を優先させ、物の従属的な性格を持たないものに対抗。

プロレタリアートの嗜好に立脚、霊的な価値観への共感は消えている。

人間の世界、諸物（生産関係）の体制とみなしている。

高尚な欲求（？）変わりやすく、曖昧で、開放的
旧世界の住民の高尚な欲求、伝統的で不変

プロレタリア、物から出発して人間の解放を企てる。人間を野心的な道（？）に導くことはしない。
そこに存在するものに限定。

互いに従属しあう諸物の連鎖全体に対立する強固な限界は存在しない。

利己的な集団の意図を隠さない。それゆえ一層苛烈

解放の仕事が活動家を物に完全に従属させることに、同意してしまう。

この姿勢、中産階級の人々（ブルジョワジー）に、物への個人の還元を回避する自由を人間のために
維持しているのは自分たちだという印象を与える

（活動家は常に物に従属している）

労働政策の大きな諸成果（8時間労働など）、確固たる成果が、今や一般化してしまった一時的な隷
属なのだ。

ブルジョワジーはもはや自分たちの歴史的使命を自覚していない。共産主義者の上げ潮の運動への応
答として、つゆほどの希望も立ち上げられずにいる。